2002-05

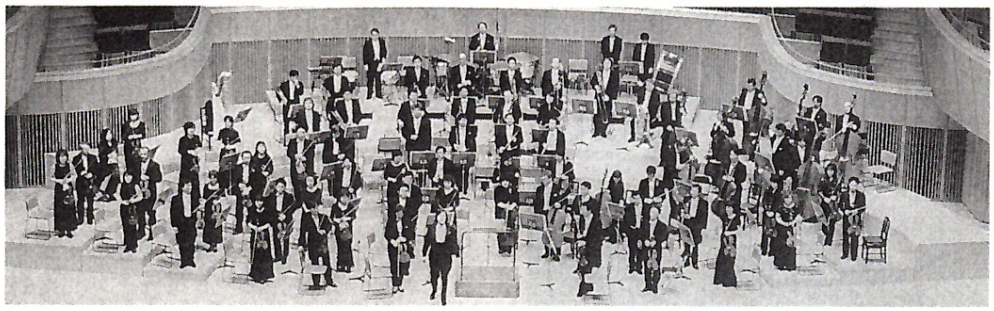
札響くらぶ

第20号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

第４回札響くらぶコンサート開催!!

迷指揮（？）に会場大爆笑

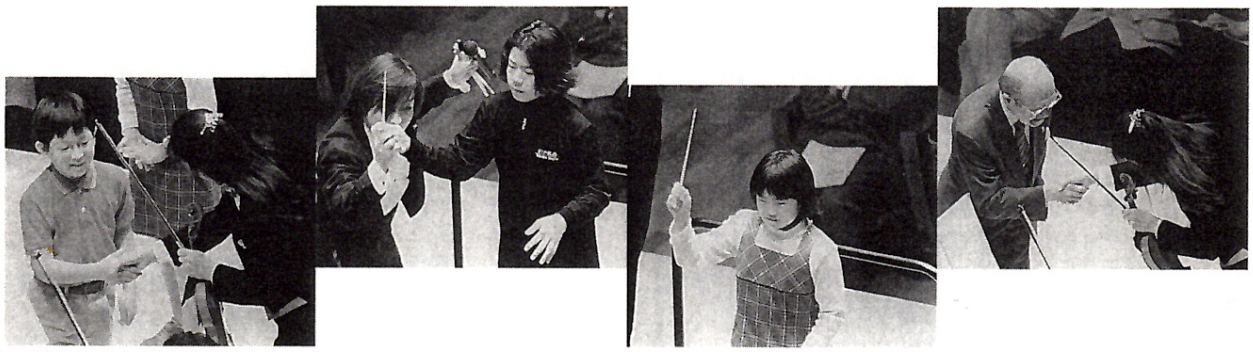


去る４月27日、札幌コンサートホール・キタラ大ホールで、第４回札響くらぶコンサートが開催されました。

今回は、指揮とお話に若手人気指揮者の飯森規親さんをお迎えし、昨年のコンサートのアンケートでリクエストナンバー１となった、ベートーヴェンの交響曲第６番「田園」をメインに行われました。

人気の「指揮者にチャレンジ」のコーナーでは、まず、３人のチビッコが登場。緊張で体が固まり、指揮棒が振り下ろせない、迷タクトで楽員がずっこけるなど、珍場面続出に、会場は爆笑の渦に包まれました。飯森さんの巧みなリードで、楽しく進み、最後に、札響くらぶスタッフの石川政治さんも登場し、念願の「運命」を指揮しました。

飯森さんの手慣れたお話とリードで、今までにもまして、明るく楽しいコンサートになりました。ステージ、客席ともに心から楽しんだコンサートでした。



札響くらぶは札響を愛するファンの札響応援団です

ソリストと語る

2001年11月16日の定期演奏会に出演された小山実稚恵さんに、前日のキタラでの練習の合間に、竹津宜男さんと対談していただきました。

札響との初協演は思い出深い体験でした!!

小山 実稚恵 さん（こやま みちえ）

今最も充実している日本人ピアニスト

小山実稚恵さんのプロフィール

6歳よりピアノを始める。東京芸術大学卒業、同大学院終了。第7回チャイコフスキー国際コンクール・ピアノ部門第3位、第11回ショパン国際ピアノコンクール第4位入賞。両コンクールに入賞した初の日本人として、一躍脚光を浴びる。

1986年ショパン協会賞を受賞し、チェコのショパン・フェスティバルに招待される。90年モスクワ音楽院大ホールでリサイタル。91年ロイヤル・フィルとの協演でロンドン・デビュー。94年チャイコフスキー国際コンクールの審査員を務め、同年飛騨古川音楽奨励賞受賞。

国内外でのリサイタルの他、サントリーホールでは2年ごとにテーマを決めて定期的にリサイタルを行っている。オーケストラとの協演にも意欲的で、日本は勿論、世界中の主要なオーケストラ、指揮者と協演しており、今、最も活動の充実した日本人ピアニスト。

竹津　お生まれは宮城県ですか。

小山　はい、仙台生まれの盛岡育ちです。父の勤めの関係で、仙台に3歳までいまして、中学2年までは盛岡、その後は東京です。

竹津　ピアノを始められたのは。

小山　私、英才教育ではないのです。3歳頃から家にピアノはなかったものですから、おもちゃのピアノで盛んに遊んでいたようです。それで、5歳の頃に親がピアノを買ってくれまして、盛岡の先生に習い始め、中学3年から東京の先生に代わるまで、ずっとその先生に習っていました。

竹津　良い先生に巡り合ったのですね。

ところで、小山さんというとどうしても、チャイコフスキーとショパンのコンクールが話題になりますが。

小山　チャイコフスキー・コンクールは、海外派遣コンクールの推薦を受けられたので、見学方々行ってみようか、という感じでした。でも、今思い返してみますと、あの時に一次合格できたことが、いままでの私には一番嬉しかった出来事だったと思います。ホールの響きは素晴らしい、聴衆も素晴らしい、好きな方を選べる2台のピアノの両方が素晴らしいという具合で、世間知らずだった私には大きなカルチャー・ショックでした。

ショパン・コンクールの方は、もう演奏活動を始めた後でしたが、「ショパン」だから受けたという感じでした。ニュースなどで情報は得ていましたので、現地に行ってもそんなに感激という感じではありませんでした。出場者は本来ならコンペティターであるはずなのですが、コンクール期間中にとても仲良しになりまして、私にとっては大切な友人を得られた貴重な体験でした。それと、日本で聴く、何となくフランス風なショパンと違って、ポーランドで聴くショパンはずっと「土臭い」音楽で、とても勉強になりました。

竹津　ショパン・コンクールの時は、マスコミにも大々的に取り上げられ、時の寵児といったような扱いでしたが、その後の活動は意外なほど地道なものでしたね。

小山　この10年位は、年間約60回のコンサートに出ていますが、当時の私はレパートリーも少なく、派手なコンサート活動など不可能だということを誰よりも自分が知っていました。ですから、年に3曲新しいコンチェルトをマ

スターし、10年で30のレパートリーを増やそうと一生懸命勉強していましたので、活動は地味にならざるを得ませんでした。

竹津　結果として、それが今日の小山さんの大成に結びついたのでしょうね。リサイタルとコンチェルトではやはり違いますか。

小山　リサイタルは、選曲・プログラミングからすべて自分の思い通りにできるという点で、自由な音楽作りができて楽しいと思います。コンチェルトの場合は、オーケストラに触発されて新しいものを得るチャンスが多く、その日のプログラムの位置づけによっても弾き方が変わって面白いですね。指揮者やオケによって同じ曲でも変わりますし。

竹津　イングリシュ・チェンバー・オーケストラとも協演されていますが、いかがでしたか。

小山　音楽が緻密で、最後のフレーズまできちんとやる。よく考えられていて、音楽が体に染みついている本当のプロという感じでした。練習と本番が違うというオケも多いのですが練習の経過がきちんと本番になっていましたね。

竹津　ルービンシュタインがお好きだと伺っていますが。

小山　ずっと、ホロビッツとルービンシュタインが好きで、本当にすごいと思います。

ホロビッツは、腕の良いシェフが、盛りつけから食器に至るまで、この上ない料理を披露しているようで、遊び心でゆったり弾く音楽でいいですね。次はこうなるだろうという予測を、常に越えるところが素晴らしいと思います。

ルービンシュタインは、その日の最上の肉を塩と胡椒だけで味つけして出してくれるような音楽だと思います。もっと何かしてもいいのではないかと思うのですが、結局他に何も必要ないという感じです。

二人とも、基本的な部分での音楽が、人生経験によって変わっていくということはありませんでしたね。常に、本人の感じている音楽が、そのまま音に表れていたような気がします。やはり、生まれついての才能なのかな、と思います。

竹津　ところで、札響との最初の協演は、予定していたピアニストが指を怪我され、急遽代役でということでしたね。

小山　はい、チャイコフスキーのコンチェルトでした。

竹津　直接釧路に来ていただいて、ゲネプロのみでぶっつけ本番というものでしたが、いつ頃でしたかね。

小山　確か83年だったと思います。当時はまだ大学院の学生で、手塚幸紀さんの指揮でした。帰りに釧路の空港に行きましたら、霧で飛行機が飛べないということで、帯広空港まで送っていただきました。私としても、とても印象深い、思い出に残る体験でした。

竹津　札響とは前回はいつ頃でしたか。

小山　もう、５年ぶりくらいになると思います。

竹津　今の札響はどうですか。

小山　こんな素晴らしいホールを本拠地にするようになったためでしょうか、とても弱音の響きが美しいと感じました。弱い音をいかに説得力をもって表現するか、という事が音楽では最も難しいことだと思います。ｐの表現によってｆが生きてくる訳ですよね。

竹津　キタラでの最初はいつですか。

小山　２年前のＰＭＦでのＮ響との協演です。花火大会があるということで、急に開演時間が早まったりしまして、関係者の方は大変だったようですが、終演後に見た花火は忘れられません。良い記念になりました。

竹津　ああ、あの時ですか。

ところで、小山さんは変に作らずにありのままに弾いておられますね。

小山　本当は、もっと作った方がいいのかな、と思うこともあるのですが。（笑）

竹津　いえ、今では貴重な音楽だと思います。明日のモーツァルトも楽しみにしています。

小山　編成が小さいですから、室内楽を演奏しているような雰囲気で弾けるのがとても嬉しいです。指揮者の音作りも非常に繊細で、インスピレーションを与えてもらっています。

竹津　ありがとうございました。これからのますますのご活躍をお祈りいたします。

（文責　佐藤良次）

なごやかに　恒例の交流会

札響くらぶコンサート終了後、キタラのレストランでいつものように、指揮者の飯森規親さんも参加して、会員と楽員の交流会が開催されました。会場のあちこちで、会員と楽員が楽しげに語り合う風景が見られました。

会は、上田実行委員長の挨拶に始まり、札響の白鳥専務理事の発声による乾杯となり、楽しい歓談の中、飯森さんがマイクの前に立ち、「世界中のオーケストラが、聴衆の高齢化で危機的状況を迎えつつあり、必死になって若い世代の聴衆の掘り起こしに努力しています。だから、このようなコンサートは非常に大切ですし、それをこんな素晴らしいホールで開催できる札響は本当に羨ましいと思います」と挨拶されました。

今回は、会員ではなく、楽員の皆さんが「札響くらぶコンサート」にどんな感想を持たれたのかを伺ってみました。

「日常的に行っているコンサートと違い、聴衆との触れ合いの強さを感じました。客席とステージの一体感が強く感じられました。客席の雰囲気というものは、自然とステージに伝わるもので、演奏していていい雰囲気だなと強く感じました」

（コントラバス・藤澤光雄さん）

「雰囲気がアットホームで、とてもよいコンサートだったと思います。指揮の飯森さんのリードもとてもお上手で、とにかく楽しく弾かせていただきました」　（チェロ・廣狩理栄さん）

「何と言っても、暖かい聴衆の皆さんの気持ちが感じられました。指揮者のコーナーは本当に楽しいのですが、もっと他のアトラクションもあっていいのかなと、ふと思いました。札響くらぶの皆さんで知恵をしぼっていただいて、もっと我々を積極的に使って楽しんでいただけるアイディアを出していただければもっと楽しいコンサートになるのでは、と思います」　（ファゴット・坂口聡さん）

「客席と一体化したコンサートで、奏者にも聴衆の皆さんの気持ちがよく伝わったよいコンサートでした。指揮者も楽しい雰囲気を作って下さったと思います。今後も、楽員も企画に参加して、より楽しいコンサートを作れたらと思います」

（ヴァイオリン・橋本幸子さん）

楽員の皆さんにとっても、楽しいコンサートであったようです。

楽員代表の真貝裕司さんによる閉会の乾杯まで、なごやかな交流会は続きました。

札響物語 XX

海 外 公 演 ③

1975年に行われた札響初の海外公演、最後の公演地はドイツ・アルプスの街ガルミッシュ＝パルテンキルヘンでした。

ガルミッシュ＝パルテンキルヘンはミュンヘンから南へ約80キロ程のドイツ・アルプス山間の小さな街で、登山電車の始発駅があります。オーストリアに近いためか、ドイツよりオーストリアの香りがする街でした。

1936年、ヒトラーのナチス・ドイツが国威発揚の目的で冬季オリンピックを開催するため、ガルミッシュとパルテンキルヘンの二つの街を合併して作った街だそうです。その次1940年の冬季オリンピック開催予定地が札幌だった関係で、札幌市とは親しい付き合いがあります。残念ながら、第二次世界大戦が始まったため札幌での開催は32年後になりました。

バスが街に入ると、国道沿いの民家の壁にはフレスコ画が描かれ、窓という窓は花で飾られていて、まるでおとぎの国に到着したようで、車内にざわめきが広がりました。居眠りをしていた楽団員も何事かと目を覚まし、一心に沿道の景色を眺めていました。

到着後の軽食時に、チロルの民族衣装を着た演奏者によるチロル音楽の演奏があり、演奏会後のレセプションも肩の凝らない和やかな雰囲気で楽しめました。さすがに牧畜の里らしく、このレセプションには各農家から持ち寄られた自慢のチーズがテーブルに山のように盛り上げられ、チーズ好きはワインを片手にチーズにむしゃぶりついたのでした。中でも、強烈な匂いを発するブルーチーズに飛びついたのは、食べ物にうるさい楽団員でした。

「アルプス交響曲」を作曲した、ミュンヘン生まれの20世紀を代表するドイツの作曲家・指揮者リヒャルト・シュトラウスは、美しいドイツ・アルプスをこよなく愛し、朝夕飽かず眺めて育ちました。動乱の世紀に活躍し、終焉の地にここガルミッシュ＝パルテンキルヘンを選んだのでした。

演奏会場のクール・テアター（文化会館）に至る道路はリヒャルト・シュトラウス・シュトラッセ（通り）と命名され、会場のクール・テアターは古い建物ですが、周りに廊下が付いた開放的な雰囲気の造りでした。

会場に楽器のトラックが着いて、扱いなれた地元スタッフが楽器の搬入・セッティングをする様子をそばで眺めていたのですが、言葉はドイツの津軽弁という風情で面白く優しく、人の良さが表情や態度に表れていたのがとても印象的でした。

演奏会場の音響も「何も足さない、何も引かない」自然なもので、さすがに世界の音楽の中心地に囲まれた街の文化会館でした。

会場入口に、各種公演のポスターが貼ってあるのはいずこも同じです。もちろん、ペーター・シュバルツ指揮札幌交響楽団のポスターも貼ってあり、入場料は22マルク（当時、１マルクが約100円）で納得のいく金額でした。

ところが、２枚隣にはラファエル・クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団の美しいポスターが貼ってあり、同じ会場で２日違いの公演で、それだけでも感動ものなのに、なんと入場料は11マルク。札響の入場料の半額なのです。このポスターは多くの楽団員の目にも触れ、皆クラシック音楽の大本山へ来たプレッシャーをあらためて感じたのでした。

真剣なリハーサルが終わって、目ざとい楽団員が予め街で見付けていたライスカレーがあるレストランに大勢が押し掛けました。ワイワイガヤガヤ、日本を離れて10日しか経っていないのに、らっきょも添えられた本格的な懐かしい日本式ライスカレーにしばしホッとした時間を過ごし、本番に臨んだのでした。

聴衆の暖かい雰囲気はステージの上までとどき、札響はこのツアーの締めくくりのコンサートを、のびのびと楽しみながら演奏しました。公演後のレセプションは深夜にまで及び、打ち解けた心からのもてなしに、時間を忘れて過ごしました。

札響もいただいた「シュテルン・デア・ヴォッヘ」（今週の星）賞を出している南ドイツ新聞に「素晴らしく上手いオーケストラだった。もっと情熱的な指揮者が必要だろう」と書かれました。

（竹津宜男）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　第2ヴァイオリン副首席奏者

井上（いのうえ） 澄子（すみこ） さん

英国公演の思い出を

同時多発テロの後であり、多少の緊張感はありました。そうした中での演奏会、演奏終了時のスタンディング・オベーション、演奏の合間を縫っての街の散策、古色蒼然とした教会のたたずまい、ストリート・ミュージシャンの演奏など、心に残ることばかりです。この公演で得たものを、今後の演奏に役立てていきたいと思っています。

ヴァイオリンとの出会いは

両親が音楽関係の仕事をしていましたので、音楽の流れの中で生まれ育ちました。3歳頃からヴァイオリンをもち始めたらしいのですが、何となく自然にやるようになっていました。(突然声をpianissimoにして)本当は、どうやってエスケープしようかと考えていたんですよ　フフフ…。

ヴァイオリンの練習と普段の生活との調和はどのようにして

札響は年間100回前後の演奏会があり、それに合わせた練習スケジュール、そして体調の維持、普段心がけていることはこの二つにつきると思います。

昨年、車を購入しましたので、それを有効に使って心身のリフレッシュをし、夜は琥珀色の美酒に酔い、またもリフレッシュという感じです。

女性でいらっしゃるので　ステージ衣装には大いに関心がおありと思いますが

札響には正式な制服のようなものはないと聞いております。黒を基調にしたものであれば良いようです。

札響入団のいきさつは　また　札響の印象は

もともと、家族の都合（父の急死）で、札幌に帰りたいと考えていました。たまたま、運よくオーディションがあり、入団して現在に至っています。

札響の印象としては、楽団員各自が自己の個性を大切にし、生活の時間と仕事の時間を上手に使っているという感じがしました。

音楽に関しては、指揮者の意図することに、本当に忠実なことと、音の透明さが第一印象でした。

札響くらぶに一言

いつも、いろいろと感謝しております。

これからも、50周年、60周年と、少しずつ問題をクリアして、一緒に歩んでいけたらと思っていますので、よろしくお願いいたします。

（インタビュアー　石川政治・細川馨）

札幌交響楽団　ホルン副首席奏者

島方（しまかた） 晴康（はるやす） さん

札響に入られた動機と楽歴を教えて下さい

私は東京出身で、国立音大を卒業した後、東京でしばらくの間音楽活動をしておりましたが、87年からウィーンに留学し、演奏活動をしながら90年まで3年くらい学んでおりました。ホルンをこのままやり続けることがよいのか、演奏仲間に尋ねたところ「おまえの音楽は、我々の伝統とは少し違うようだが、おまえがホルンを吹かずして誰が吹くというのか」と言われ、帰国を決心しました。でも、まっすぐ東京に戻るのが嫌で、ちょうど札幌でPMFが開催されていましたので、参加させてもらいました。PMFでの3週間、札幌の音楽的環境にすっかり魅せ

られ、東京に帰ることをやめ、そのまま札響のオーディションを受け、入団させていただきました。

札幌の音楽的環境に魅せられたというのは？

生まれ育ったのが東京なのですが、満員電車に乗って練習会場や演奏会場に行くというのが、私にはどうしても慣れることが出来ませんでした。ヨーロッパ・ウィーンでの音楽活動は、気候・風土とも私にとって音楽をするのにこの上ない環境と感じていましたが、札幌はまさにヨーロッパの気候風土によく似ており、私が音楽をする場所としては外国か札幌のどちらかだと思っています。

特に、キタラが出来てからの札響は、音楽をする者にとっては、ほぼ最高のロケーションの中にあると言えます。札響入団から12年が過ぎましたが、演奏家としてとても恵まれた状況にあると思っています。

札響の楽員の方々は　皆さん仲が良さそうですね

そうですね、家族的というかアットホームな雰囲気があって心地よいですね。

楽員はとてもまじめで、自分達の音楽を追求することに真摯であると思います。先の英国公演では、どの演奏会においても、全員全力投球で演奏して参りましたので、一層楽員相互の信頼感や親密度が高まり、札響にとっても楽員にとっても得るものが大きかったと思います。これから、皆さんにもっとよい音楽をお届けしていけると思っています。

札響の課題は？

そうですね、私はクラシック音楽の将来についてかなり厳しいという認識をもっています。クラシック音楽を聴きに来てくれる方の年齢層をみても、若い人がとても少ないのが現状です。札響は創立40年ですが、このままでは今後40年はたして活動を続けていけるのか疑問です。インターネットの通信技術がもっと発達し、近々ベルリンフィルやウィーンフィルの演奏をリアルタイムで家庭で聴けるようになることでしょう。クラシック音楽を生のオーケストラで聴くことの素晴らしさを、地元のオーケストラならではの良さをわかってもらう努力を、私たち自身していかなければ、オケの将来はないとの、かなりの危機感をもっています。

札響くらぶも　同じ考えから聴衆を増やす活動をしようとしているのですが

はい、「札響くらぶコンサート」をはじめ、先見性のあるとても有り難い活動をされていると感謝しています。私は、子どもを大切にすることが大事だと

思っています。何度か小学校を訪れ、子ども達に直接音楽を聴いてもらった経験がありますが、生身の人間が奏でる音楽に直接触れた時の子ども達の驚きと感動が、その目の輝きではっきり感じ取ることが出来ます。札響がオーケストラとして生き残るためには、子どもを大切にすることが第一であり、そのために地元オーケストラとして何が出来るかを考えていかねばならないと思います。

地下街コンサートなど　札響も頑張っているようですね

昨年から始めた地下街でのミニコンサートは、とてもよい試みだと思います。聴衆と近い場所で演奏することで、聴いていただいている方々も奏者も互いに親近感をもつことが出来ます。札響に親近感をもっていただくことは、私たち楽員がよい音楽活動をする基盤でしょうし、これが札響の財産になると思うのです。

今年の定演「ベートーヴェン交響曲全曲演奏」への思いをお聞かせ下さい

尾高さんは札響に対して、その時々ハードルを設け努力目標を作ってくれます。このシリーズでは、よい音楽を作る素材としての我々オーケストラと、シェフ尾高が創作する「料理」をお楽しみ下さい。いい演奏をして、素晴らしい空間を皆さんと共有出来たとき、きっと、天から神様が降りてくると信じています。お客様のおなかを一杯にすることは出来ませんが、胸一杯にする努力をしていきたいと思います。

（インタビュアー　上田文雄、写真　石川政治）

from 「札響くらぶ」

2002年度総会が開催されます

年一回行われている札響くらぶ総会が、今年も次の通り開催されます。

日時　2002年5月29日（水）　午後5時15分より

場所　豊平館

議題としては、例年の通り、「2001年度事業・決算報告」「2002年度事業計画・予算案審議」などが行われますが、今年は2年に一度の役員改選の年にあたっています。

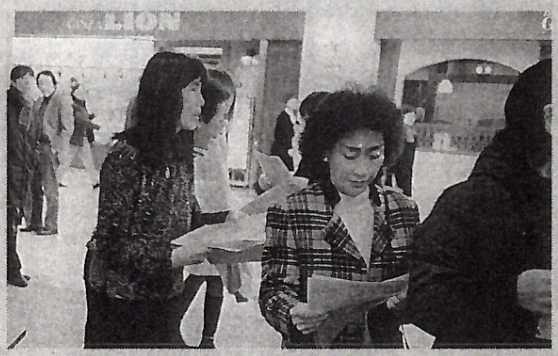
会員の皆様のご意見を、会の運営に反映させるためにも、ご都合をつけ、お誘い合わせの上、多数の皆様のご出席をお待ちいたしております。

オーロラタウン・コンサートを支援しています

昨年、札響創立40周年を契機として始まった「札響オーロラタウン・コンサート」が、今年も継続して行われています。

今年に入ってからは、2月を除く各月に一回行われており、4月までに通算8回のコンサートが行われました。市民の皆さんにもかなり知られるようになり、毎回、開始時間の大分前から、熱心なファンが並ぶようになりました。札響では、今後も事情の許す限り、月一回のペースで続けていく予定だそうです。

私たち札響くらぶのスタッフも、趣旨に賛同し、毎回ボランティアでお手伝いに参加しています。



編集後記

今年も幸運に恵まれ、東京公演を聴く機会を得ました。5時頃から当日券売り場に熱心なファンの列ができ、聴衆は札幌よりも多い8割以上の入りでした。

ニキティンさんも顔を見せ、「この人私のお友達」と同じ東響のヴァイオリニストを紹介されました。ニキティンさんも、すっかり東響の一員としてなじんでいるようでした。

演奏は熱のこもったもので、終演後、周りの人々の評価を、それとなく聞いていましたが、皆さん口々に良い評価を述べ合っておられ、とても嬉しく思いました。

ただ、せっかく本州に行って、東京1公演というのはもったいない気がしました。せめて、北海道とかかわりの深い東北での公演もできないものかと思いました。

交流会で、飯森さんが「世界中のオケが、今若年層のファン獲得に頭を痛めている。危機的状況はすぐそこまで来ていると認識している」と述べていらっしゃいましたが、札響も例外ではないでしょう。私たちファンもできる限り協力したいと思いますが、まずは札響くらぶ会員に一人でも多く、定期会員になっていただけたらと思います。　（佐藤良次）

次号の「札響くらぶ」は7月発行の予定です。